

特集・かえで幼稚園創立25年

特別記念講演

親とは子どもに語る人

福音館書店相談役・短期大学部講師 松居 直

1997年後半は、金融関係のあいつぐスキャンダルに明け暮れた感がありました。最初の野村証券のときは、わたくしの経営理念とは余りにもかけ離れた出来事で、他人事のような気がして深く考えたりはしませんでした。しかしつづく第一勧銀のときは、単なる事件ではすまされない、日本の社会の構造的な腐敗と日本人の精神的な病理を強く感じました。お金の問題ではなく、心の問題だとおもいました。新聞を読みながら、実業界のエリートとおもわれる人がなぜいとも簡単に思慮を失って過ちをおかすのか、この精神状態はどこからくるのかを思いめぐらしていたとき、突然わたくしの脳裡に浮かんだのは、これは「三びきのこぶた」ではないかという突拍子もない連想でした。

「三びきのこぶた」はイギリスの代表的な物語です。ただこの昔話に秘められた深い意味を無視して、勝手に話の筋や登場人物の役割を変えて、このおもしろい昔話を骨抜きにしている絵本や再話がとても多いことは残念です。特に致命的なのは、レンガの家を建てた三番目の子ブタがオオカミと喰うか喰われるかの知恵くらべの末、驚いたことにオオカミを晩ご飯に食べてしまうという件くだりをカットしてしまう例です。ここを変えてしまったのでは、この昔話の意味と力とおもしろさは失われてしまいます。



講演者と会場

そのことについての見事な分析と解釈を、アメリカの精神分析の権威であるブルーノ・ベッテルハイムが名著『昔話の魔力』（評論社）で明快に示しています。この本は情緒障害児の治療にあたって、昔話を語り聞かせることが大きな効果があったことを、実証的にかつ具体的に解明した実に興味ある本です。

ベッテルハイムの「三びきのこぶた」の解釈と、昔話が子どもの成長に計り知れぬ働きをもち、子どもがやがて大人に成長して社会に出たときの行動の支え、生きる力となるという論旨は説得力があります。その要旨は「信徒の友」二月号に紹介しましたので、ぜひともお読みいただくと幸いです。

幼児期に語り聞かせられた絵本や昔話の物語には、人間が生きてゆく際に出会うであろうさまざまな出

来事の典型が語りこめられているので、そうした物語を幼児期にくりかえし耳で聞いて楽しみ、深く心に留めていることは、人間が社会生活を営みくらしでゆくときに、形をかえて知恵としてよみがえってきて、生きる支えとなり力となるのです。ただし自分で読むよりも、耳で聞く体験のほうがはるかに大切です。絵本は子どもが読む本ではなく、大人が子どもに読んでやる本だという意味もそこにあります。

近頃しきりに“親とは何か”と考えることがあります。今こそそのことを真剣に考えてみるべきときです。これから親になる可能性のある若い人たちも、そして子どもたちも考えてみるのが大切ではないでしょうか。わたくしの結論は、“親とは、子どもに語る人”ということです。親の背をみて子どもは育つということもたしかに的を射ていますが、背はみえても正面に廻れば顔のない親が意外に多いかもしれません。顔をみても語る口がなく、聞く耳がない親もいるでしょう。親の背をみて……は結果論です。

一般的に子どもの将来を思うとき、親が願うことは、できることならば少しでも多くの財産を子どもに残してやりたいということです。物を残すこと、財を残すことを考えます。子どもの心に何を残すかは、あまり気にしません。子どもの心の問題は保育者や教育者まかせなのでしょう。文部省のアンケートで、「学校に何をいちばん期待するか」という父母に対する問いに、「善悪を教えてほしい」という回答がトップであったと報道されているのをみて、子育てを放棄している親の姿を感じました。善悪は学校で教えてもらうものではありません。それこそ家庭で親が示すべきもっとも大切なことで、そこに親の生き方や姿があらわれるのです。

ドイツの宗教家ツインク夫妻が『幼児の心との対話』（新教出版社）で、“我が子の信頼を失いたくないと考えるなら、自分自身が真実大切だと心底から

信ずるものを、子どもに与えるほかはない”と述べていることは、とても重大な指摘です。あなたは、“自分自身真実大切だと心底から信ずるものを”お持ちですか、それを子どもに伝えましたか、という二つの問いかけがあります。内心^{じくじ}忸怩たるものをわたくしは感じます。

昔話を語り手に聞かせていただいたり、読んだりしていますと、昔の人が子どもに伝え心に残そうと願ったものは、“ことば”だったのだと気付くことがたびたびでした。語り手は自分に伝えられた物語のひと言ひと言に、新たに自らの思いや願いをこめて語っているのです。自分の声で語っているにもかかわらず、そのことばは私的なものでなく、人間が生きてくときの力となる普遍的な知恵のことばを語っているのです。だからこそそのことばは次の世代に伝わる力を持ち、語る力を備えたことばとして生かされてゆくのです。昔話は昔の物語にはちがいがありませんが、語り手はそれを未来に伝えているのです。昔話は実は昔の話ではなく、子どもの未来に語りかける物語です。総会屋といわれるオオカミに便宜を計った人たちは、子どものときに「三びきのこぶた」を語ってもらったことがなく、親としてわが子が話してやったこともなかったのかと考えこみました。

先程のツインクのことばに対しては、とても出来ましたと答える自信などはないのですが、過去を振り返ってみていえることは、三人のわが子が小学校三年生か四年生ぐらいのころまでは、ほんとうに忙しい仕事の暇をみては絵本や童話を読んでやったことを通して、いろいろのことを自分の声で語り伝えることができたのかなという思いです。本を朗読するということは、作者により選び抜かれたことばを読み手の声で読み手のことばとして伝えることでした。そのとき読み手と聞き手は手をつないで物語の世界を旅します。それは双方にとって楽しい時間と空間であり、共通のことばの体験です。そのときの

喜びや幸せは、時を経ても心に残りつづけます。

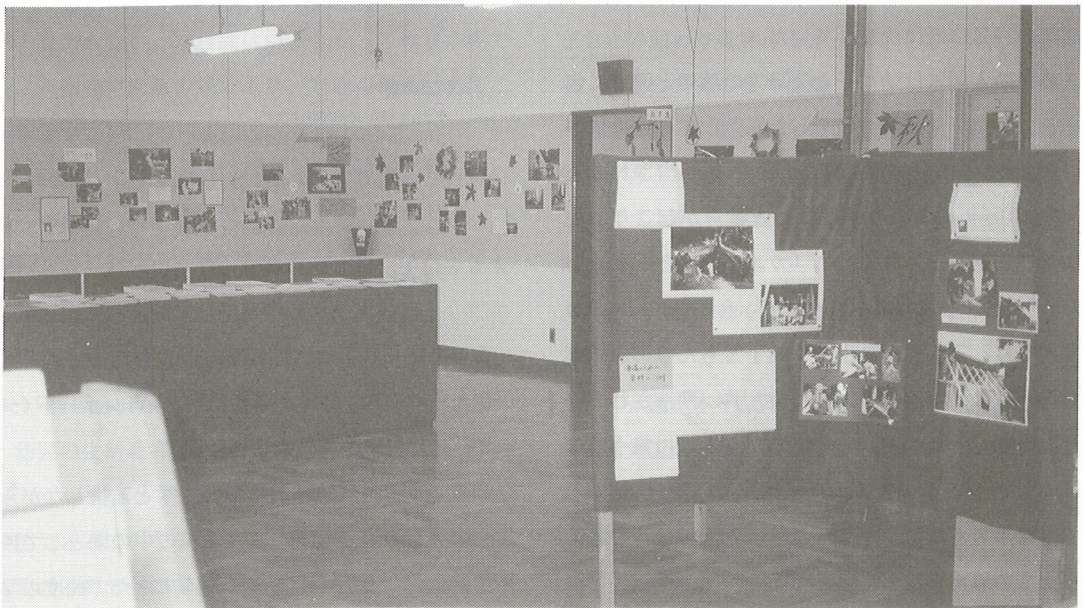
十年近くも子どもに本を読んでいますと、本の数は数百冊にのぼるでしょう。その本の多くはわたくしの共感できる物語であり、中には感動した物語も少なくありません。そして読み手の心の動きは、聞き手の子どもによく伝わるようです。親が語るということはそうしたことです。本の書き手はそれぞれにすばらしいことばを読み手に与えてくれ、しかも読み手の影にかくれています。著者の名は知らなくとも、誰に読んでもらったかは忘れません。そこには共に居る喜びと、ことばの持つ不思議な力を感じる喜びとがあります。



ことばは目にみえないけれど、ことばには目にみえる世界を創造する働きがあることを体験します。ことばこそ家庭の核となるものです。

子どもと本を楽しむ体験を通して、わたくしは親となることができたように思います。むろんそれだけではありませんが。しかし子どもによって親となったことは事実です。子どもが親を育てたようなものです。そして親となることにより、少しは大人になれたのかもしれませんが。家庭は子どもが育つ場であるとともに、親が育つ場でもありました。教育でなく共育だというのが実感です。それが崩れれば日本の保育も教育も音をたてて崩れます。今まさにそのきざしを感じます。子どもの育ちの危うさに、親が親として育たなくなる時代を感じます。背中をみるといわれるその背中があるのでしょうか。子どもに絵本を読んでやってください。

(1997年11月22日講演)



創立25年記念展示会場

かえで幼稚園25年の歩み

園長・短期大学部講師 土橋克子

本園は1967年、長野彌元院長が東洋英和女学院の教育に感服された東急電鉄の小滝頭忠氏の尽力を得て現在地（たまプラーザ）に土地を購入されたことに始まる。園には山肌が削られた丘で、短期大学の先生方が長野先生の指さす彼方を眺めている一枚のセピアがかった写真が残されている。当時は美しが丘の高台から西方に富士山が望まれ眼下に小さく駅が見えたと言う。それはまさに、キリストのひと粒のたねが地に播かれた直後と言えるのかも知れない。そして1973年に、学院90周年記念事業の一環として故石井次郎院長に受け継がれ短期大学付属幼稚園として創設された。

当時、新設の公団住宅に入居が決まった若い家族で人口が急増していたので、開園に際して507名もの応募者があった。その中から抽選によって135名（3歳児15名、4歳児90名、5歳児30名）の入園が前年の11月に既に決定していた。

最初の入園式は幼な子と父母方の熱気と興奮に包まれていた。園長でもいらした石井次郎先生は挨拶に立ち、「この幼稚園の名前は」と話し出されると一斉に、「カエデヨウチエン」と歓声が起こり、先生がひと言、話される度に「カエデ!!」とどよめいた。「そう、神様は皆さんの……」「ハイ」の大合唱となり、正面に躍り出てくる子どもたちに、私も、この幼稚園がどんなに待たれ、期待されていたかを理解したのだ。そして心からここに集う幼な子と父母方の幸せを願い、仕える者でありたいと思ったのである。やがてそれは、本園の保育を考える上での原点となっていく。

本園の保育は、「保育方針と特色（規定集P.1091）」にあるように、①キリスト教による保育を行うこと。

②「遊び」によって子ども自らが自発的・創造的に発達しうる保育を行うことを志してきた。また一方で、当時ではまだ一般的ではなかった三歳児保育や、統合保育の実践を他園に先がけて新年度から行ってきた。そして25年を迎えた今日、建学の精神である「敬神・奉仕」のもと、神への礼拝は日々生活の中で喜びをもって守られている。また一方において、「自分らしさをもって生きること」と「ともに生きること」の二つの柱をおき、次のような考えのもとで保育を展開している。

…… 創立25年、
かえで幼稚園の子どもたちは ……

自分らしさをもって生きる

子どもたちは、自分らしさをもって安心して過ごす中で、物と出会い、自然と出会い、人と出会います。
たとえひとりでもひとりぼっちでない空間で、自ら心を動かし、知恵を働かせ、周囲と関わりながら、居たい場所・やりたいもの・やりたいことを選んで遊びます。
遊びの中で、自分を表現し、願いを實現し、達成の喜びを味わいます。
また、感性を豊かにするとともに、知識や技術も習得します。
そして、自分は、神と人ともに愛されている存在であることを感じとります。

ともに生きる

子どもたちは、互いに関わりながら、自分の気持ちを伝え、相手の気持ちを聞きます。
主張することと、ゆずることを体験します。
いっしょに創り出す喜びと、ぶつかりあう悲しみを感じます。
なかまと保育者とともに集まって過ごすことも喜びます。
なかまとの生活の中で責任を果たそうとします。
そして、このようなことを通し、隣人を愛し、ともに生きる子どもへと育っていきます。

(25年写真集より)

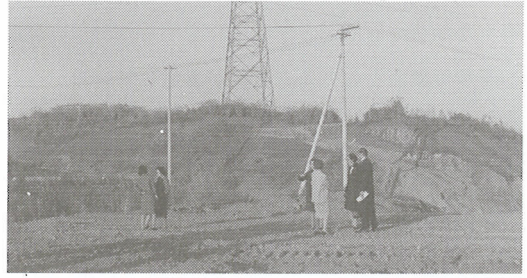
ここで語られる幼児の日常は保育者によって考察が加えられ、学会論文となり、また保育レポート(～No.16)に記録されてきた。

このように付属幼稚園は短期大学と連携しながら学生の実習の場として、また地域の中の園として四半世紀にわたる使命をもって歩んできた。此度の学院の改組により'98年度から大学付属幼稚園と名称を新たに出発しようとしている。

21世紀に向けて、伝統は伝統として受け継ぎつつなお子どもの側に立つ保育を模索し、しなやかでありたいと思う。25年間主に守られ、多くの方々に支えられてきたことを感謝したい。

「アポロは水を注いだ。しかし成長させてくださったのは神です。」

(コリント第I・3章6節)



予定地視察：岡田・丹羽・吉岡・斉藤・黒田・長野の各先生

父母と共に

主任 森高ホサナ

1. 創設の頃

創設当初から、私どもは「父母の会」の活動を園との事務連絡を主とするのではなく、保育に不可欠なものと考え、母親が、自主的に運営、参加できることを願ってきた。

初年度は、まず「母の会」として始め、目的は次のように考えた。

・幼児教育は幼児と母親、家庭と切り離して考えることはできない。幼稚園は幼児にとって教育の場であると同時に生活の場であり、家庭の延長であることが望ましい。

実践としては、園の保育方針や保育のあり方等の説明や理解を求めることに始まった。また、この地域が新興住宅地であり、母親が孤立しやすいこともあったので、園が母親相互の心の交流の場としての機能を果たせるような役割を持った。

2. 「母の会」から「父母の会」へ

幼児の生活を考え、子どもの誕生日会には、母親がおやつを作るなど、創設の頃から、母親も保育に参加できる工夫をしてきた。そして、母親と同時に父親の子育てへの参加を願い、初年度発足した「母の会」は「父母の会」へと移行していった。この地域は核家族が殆どでありながら、父親は非常に忙し

く日常における子どもと父親との関わりは少なかった。そこで父親にプレイデー等の行事に加えてより積極的な参加を求めて「ワークの日」(働く日)を設けた。年に数回土曜日を「ワークの日」とし、父親は子どもたちのために、園庭に遊具を創った。子どもたちはその傍らで、釘打ちなどを手伝いながら、父親の力強さを感じていた。父親は園で子どもに触れ合ったり、他の父親と知り合うことを通して、子どもとの関わりを考えるきっかけを得ていたと思う。

3. 現在の父母の会の活動

父母の会の活動は25年の歳月を経て、園と並ぶ両輪の片方として、かえでの保育を支え続けている。

各クラスから、役員が選ばれ、10名が企画・運営にあたっている。

現在の主な活動を下記に述べる。

・ルデヤ会

年に6回、本学院陶山先生と、ひばりが丘教会牧師山田先生を講師として聖書を通して学ぶ時を持っている。卒業した母親の参加を受け入れており、毎回30人位が自由意志で出席している。

・クラス懇親会

母親同士の親睦会を母親自身が企画する。園の二階にある集会室や隣接の公園の芝生でお弁当を持ち

寄ったりゲームやドッジボールをする。お互いが親しくなる機会として殆ど全員が参加している。

- ・大掃除
- ・父母の会便りの発行
- ・サークル活動

人形劇・英会話・フィットネス・コーラス・おはなしの会・ウオルドルフ人形・ジャズダンス等のサークル活動が、とてもさかに行われている。

園の二階の集会室が、保育をしている間、母親に開放されている。自発的に活動できることが母親の自己実現の場となっている。また、ここでの人間関

係が、子育てを助け合う仲間を育てているともいえよう。

少子化が叫ばれ、子育て支援が必要と言われていた中で、幼稚園の役割のひとつが子育てをしている、父親と母親を受け入れて行くことにあるのだと思われる。この父母の会の活動はその一端を担っていると思われる。

子どものために、幼稚園のために、そして親同士の親睦と学びの時として。

生涯教育とボランティア精神を分かち合う場、それが父母の会である。

かえで幼稚園と私 — 卒園生のことば

『キリスト教との出会い』

一期生 佐々木由紀子

住宅街をぬけて少しカーブした道を行くと、そこには緑に囲まれた小さなえんじ色の門……。今も変わらない私にとってのかえで幼稚園のイメージです。

転入生であった私が、一期生の29人目の仲間となりともに過ごした日々は数か月でしたが、思い出されるのはどれも暖かい光景ばかりです。転入したばかりの頃、ここにはひらがなの練習時間も折り紙の時間も無く、自分がやりたいと思ったことを感じたままに表現できることにひどく驚いたものでした。クリスマスの前にアドベントクランツを作りそれに火をともしクリスマスを待ったこと、そしてクリスマス礼拝……。後に私が進学先にキリスト教を学ぶことを選択したのは、かえで幼稚園で賛美歌を歌い、聖書からのお話を聞くことができたからだと思っています。

事あるごとに思い出されるキリスト教との出会い……。私にとってかえで幼稚園は永遠に心のふるさと

なのです。

○佐々木由紀子さんは、中高部の教員であられた故佐々木孝男先生のご長女です。

『かえで幼稚園とわたし』 原田 南海子

(五期生 原田未来 母)

「しっかり育てられましたね」……。十数年ぶりにお会いした土橋先生からのひとことに今まで娘に対して感じていた重苦しい思いがすっと軽くなりました。

幼稚園入園を前に、障害をもつ娘を受け入れてくれる園があるのだろうか不安でいっぱいでしたが、娘の望み通り幸運にも入園できて皆様に暖かく迎えていただきました。

不安や悩みだらけの母の話をきちんと聞いて、しっかり受け止めて下さったことが、母自身が安定してゆったりとして居られた大きな支えでした。ともすれば、特別視されたり甘やかされたりしがちな娘に『してはいけないこと』『してはいけない

こと』をはっきり教えて下さいました。

厳しいだけでなく、娘をありのまま受け入れ、大きな心で包んで下さって過せた園での生活を基に、親から離れて自分なりの生活をしている娘です。卒業の日、当時の主事の飯田先生に「君がいなくなると寂しくなるな」と言っていた言葉を、母は今でも嬉しく思い出しています。

母娘ともに、心和む大切な二年間でした。

『かえで25th同窓会に出席して』

八期生 河田 紀子

私は、かえで幼稚園を卒業してから随分後に受洗致しました。“自分の人生を自分なりに歩んで行く基盤として”というのが主な理由だったはずなのに、様々な経験をする毎に、“周りに合わせて長いものに巻かれた方が良いのでは？”との考えが強くなっ

ておりました。(もっとも巻かれる事も難しい様ですが)

それが、先日久しぶりに幼稚園に何って、あの雰囲気に触れている内に、「私は私で良いのだなあ」と思い直すことができました。個性を大切にしていただけにかえでの教育を受けることができて本当に良かったと改めて思いました。

最後になりましたが、とても楽しい、そして大切なひとときをありがとうございました。

○この文章は、同窓会後に寄せられた河田紀子さんからのクリスマスカードの一部です。

※これまでに、1444名の子どもたちがかえでを卒業していきました。教職員一同はそのひとりひとりとご父母との出会いを神さまに感謝しています。

(大漣知子)

かえで幼稚園25年記念行事

青木 玲子

創立25年を記念して、1997年度には下記のような行事を計画し実行した。

《ブレイデー》 5月24日(土)

準備中から雨が降り出し、当初予定をしていた横浜校地グラウンドから、体育館に会場を移した。在園児とその家族が大勢集い、所狭しと体をいっぱい動かし、楽しむひとときであった。あいにくの雨となったが、校内のポイントを巡るオリエンテーリングに出掛けていく親子もずい分あった。

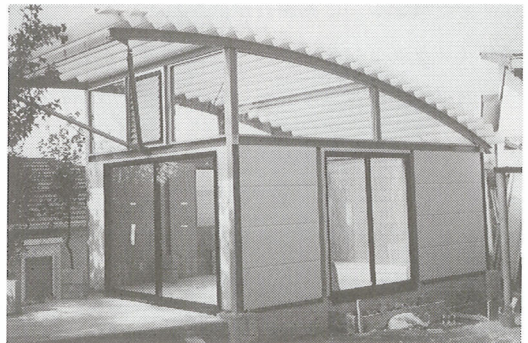
《木工室改築》 8月～9月末

創設当初より使用していた木工室の老朽化により、25年を記念して改築が行われた。それに先立ち、父母の会より資金援助の申し出があり、三年越しのバザーの収益金をそれに充てた。設計は卒業生の保護

者が快く引き受けて下さり、明るい木工室が完成した。

《記念バザー》 10月18日(土)

在園児親子のためのプログラムで、父母の会役員とバザー委員を中心に、父母の協力によって準備さ



工事中の木工室

れ開催された。ホールに於いては手作り品を中心に販売があり、幼児のためのコーナーも設けられた。喫茶のコーナーでは専門家が脱帽するくらいの種々のケーキ類が用意され、大いににぎわった。カバ公園では父親有志による手作りのあそびの広場が作られ、子どもたちの歓声があがった。

《ホームカミング・同窓生の集い》

①小学生かえで祭 10月18日(土)

毎年卒業した小学生親子を対象に、ホームカミングのかえで祭を行ってきたが、今年度は有志のお母様方による昔話を語るコーナーや、手芸品や有休品のお店が開かれたり、また人形劇団による上演もあって、懐かしい幼稚園に多くの子どもたちやお母様方が戻ってきて、楽しいひとときを過ごしていった。

②かえで25同窓会 11月24日(月)

1期生～18期生まで(中学生以上)のホームカミングが行われた。卒業生親子と旧教職員がホール一杯に集い、礼拝から会が始まった。話しはいつまでも尽きず、時が過ぎるのを忘れるひと時であった。

《母と子の記念礼拝》 11月21日(金)

在園児とその母親と共に、創立25年の感謝の礼拝を捧げた。

《創立25年記念式》 11月22日(土)

創設期より今日までの、かえでに関わる多くの方の出席をいただいた。感謝の礼拝のあと、児童文学者であり、福音館書店相談役の松居直氏の講演があり、またなごやかに感謝会が開かれた。

《クリスマスコンサート》 12月20日(土)

在園生の親子有志を対象にした、東洋英和女学院中高部ハンドベル部によるハンドベル演奏と、8期

* * *

あとがき 創立25年をむかえた「かえで幼稚園」特集号をお届けします。短期大学付属として最後の年でもあり、伝統の継承発展を祈りつつ記録に留めたいと思います。(編集・陶山義雄)



創立25年記念式にて

かえで25を記念して作られた歌、「かえでのにわ」を、感謝会で教職員が歌いました。

卒業生によるヴァイオリンとピアノ演奏が行われ、清々しい音色がホールいっぱいに響いた。

《小学生クリスマス》 12月20日(土)

毎年小学生のためのクリスマス礼拝を行ってきたが、今年は礼拝のあとに、卒業生によるヴァイオリンとピアノの音楽会も行われた。

毎月4頁から12頁の装丁で発行される『保育だより』の1例です。

東洋英和女学院短期大学部 付属 かえで幼稚園	保育だより	No.6 1997.9
涼しい風が		
<p>長かった夏休み、とりわけきびしい暑々の夏でした。そのトンネルを抜けまた子どもたちは、以前にも増してよく陽や雨し、元気いっぱい9月を迎えています。また大入り組の方からは、9月に入るとすぐにキャンプに向いました。園では身も心も、たくましく、自然にあふれた夢をみせてくれます。毎日お母さんと絶えず、その成長があるにも、日常の連続性の中にも、余程変わったことばかり限り、ほ、まりとは見えなりの普通です。今度は、キャンプという一つの限定された時間と、子どもは仲間とともに、家庭から離れて生活し、家庭ではいつも子どもが不在という野原の時間と同時にすごしたわけ。そうして中で、子どもも家族もそれぞれに、ゆたかな時間が流れたこと、連絡帳や発掘として記録されています。夏休みである、キャンプである、どんな時にも、神さまは、ともにいてくださり、私たちに、ともよい道を備え、恵みの時としてくださることに、よく理解できる機会となりました。感謝の心、ほ、です。休み中にキッチンが新しくなり、木工室については現在進行中というところ。いろいろ創立25年を迎えます。皆様のご協力をお願いいたします。</p>		